

いそくあん 為息庵と観音様



上 為息庵の額

左 千人参りの礼所でも
ある為息庵



青柳四つ角の為息庵に祀られている観音様は、聖観音様で丈は八寸、鳥仏師^{とりぶっし}の作と言われ、立像の体内に安置されているので「腹込みの観音様」とも呼ばれています。縁起も古く以前は青柳村福王に祀られていたのが、承応二年（1653）黒田藩の命で青柳町に移されました。元禄の頃、野田新兵衛一理^{の だしんべ へいちり}という人が太宰府戒壇院の運照律師^{かいだんいん うんしょうりっし}に願い仏像を修理、その頃黒田藩に根本金太夫重信^{ねもときん だゆうしげのぶ}という人がこの観音様を信仰、九尺四方の御堂を建て祀ったが狭かったため土地を買い広め二間四方の御堂を建立し、これに移し、旧堂には福王から御地藏様を移し祀りました。元禄十六年（1703）御堂の後ろに庵を結び、求正^{ぐしょう げんりょう}、玄了^{げんりょう}という二人の僧を住まわして浄土院の末寺としました。ここに速見正左衛門^{はやみしょうざ えもん}という人が立派な庭を作り、黒田藩主正之公^{まさゆき おうがくさんそうふくじ}も横岳山崇福寺^{てんあん}の天庵和尚に「為息庵」という額を書かせて庵に掲げました。その後文政二年（1819）青柳町の大火で庵は焼失しましたが、嘉永七年（1854＝安政元年）に念仏講中の寄進により額だけは再び掲げられました。明治八年（1875）、この観音堂は取り壊され翠楊^{すいよう}小学校が建ちましたが、解体材で小さな御堂を建て観音様を祀りました。明治十四

年（1881）に再度の火災によりこの御堂も焼けましたが、このときも観音様は難を逃れました。明治三十三年（1900）小学校が現在地に移った翌年にその敷地を川原区が無償で譲ってもらい寄付を募り現在の御堂となりました。境内は道路拡張のため大正十三年（1924）に狭くなりましたが、その信仰は厚く今なお訪れる人は後を絶ちません。為息庵には『根』の文字



が入った鬼瓦が二枚残っていますが、これは根本氏が明治維新の時に奥州に出陣の途中、武運を祈るため立ち寄り、無事に帰れたことを感謝して奉納されたものです。大正十四年（1925）に川原区は子孫（斎藤直助＝福岡市西公園下荒戸町）^{こうげりょう}に香華料を送ったところ、武者絵が送られてきたので、毎年七月十七日の例祭には本尊の横に掛けられ地元の人たちは根本氏の冥福を祈っています。



- 上 「根」の文字が入った鬼瓦
- 左上 腹込みの観音様として信仰が厚い聖観音像
- 左下 川原区に贈られた武者絵